2025.12.1

現代俳句千葉

159号

巻頭エッセイ

創立四十五周年記念俳句大会から溢れ出たもの

会長 羽村美和子

千葉県内外の多くの皆さまのお力添えにより、創立四十五周年記念俳句大会が開催出来ましたこと、まずは心よりお礼申し上げます。

昭和五十五年に現代俳句協会千葉県地区協議会として設立されて以来の歩みを辿りたいと、俳句大会作品集に付記として簡略な歴史と写真を掲載致しました。

会報第一号には、当時現代俳句協会本部の会長だった横山白虹氏が祝辞を寄せて下さっています。千葉県の協会は内部の力によって立ち上がりましたが「創始は難し。されど守成はさらに難し」、創立までの苦労を忘れずに邁進して欲しいとのことでした。

歴史を見ますとまさにそのとおりで、創立三十周年記念俳句大会は東日本大震災の影響で、創立四十周年記念俳句大会はコロナ禍の影響で、直前まで準備しながらも開催することが出来ませんでした。それでも前向きに最善の方法を取ってやって来たことが、写真から読みとることが出来ます。単なる義務感だけでは出来ません。俳句が好きだ、俳句は楽しい、この仲間と一緒にやりたい、その思いが推進力・内部の力となっているはずです。それを確と受け止める機会となりました。

池田澄子氏には「三橋敏雄を師として」という題で講演をして頂きました。三橋敏雄との出会いや俳句を通して、三橋の少数派としての矜持に魅了されて来られたことが熱く伝わってきました。それは池田澄子氏の俳人としての姿勢でもあり、私たちの俳句への向き合い方への示唆にも富んでおり、わくわくしながら拝聴しました。皆の心に多くの種を蒔いて頂いたと感謝しています。

四十五年のどこを切っても、俳句に対する思いが溢れ出てきます。この思いを皆さまと分かち合い、共に次へと進んでいきたいと存じます。これからもどうぞよろしくお願い致します。

目　次

創立四十五周年記念俳句大会
から溢れ出たもの　羽村美和子　1
創立四十五周年記念俳句大会　2～3
四十五周年に寄せて　4～7
記念講演「三橋敏雄を師として」
池田澄子 先生　8～10
ご来賓と顧問の皆様の講評　11～12
諸家近詠　12～13
私の感銘句　14～15
強化部だより　16
会員・会友の近況　16
研究句会報告　17
（津田沼・青葉・柏・君津・いすみ安房）
図書紹介・掲示板　18

千葉県現代俳句協会会報

千葉県現代俳句協会創立四十五周年記念俳句大会

一丸となって

実行委員長　鈴木瑩子

「千葉県現代俳句協会創立四十五周年記念俳句大会」は、令和七年十月十二日（日）千葉市文化センターに於いて開催され、八十一名の参加をもって盛会裡に行われた。

司会石井稔幹事長、開会のことばは長井副会長。羽村美和子会長の挨拶に始まり来賓として現代俳句協会より対馬康子副会長、東京都地区から山本敏倖会長、多摩地区より小山健介副幹事長、神奈川県現代俳句協会より佐籐久事務局長、朝日新聞千葉総局長永田稔様をお迎えし、ご紹介と祝辞をいただいた。そして記念講演の講師、池田澄子先生のご紹介があり、一部を終了した。

休憩をはさみ、待望の池田澄子先生の「三橋敏雄を師として」と題してご講演を頂いた。代表句をあげながら、新興俳句を目指した三橋敏雄の渾身の俳句や無季俳句等を一時間にわたりご講義いただき、聴衆を存分に魅了した。並木前会長より花束贈呈が行われた。

その後、石井紀美子俳句大会副委員長より挨拶があり、記念俳句大会の顕彰（高校生の部含む）が行われた。ご来賓や顧問の先生方による講評も楽しく拝聴した。木之下みゆき副会長の閉会のことばをもって記念大会が終了した。

今大会は三月に役員改選があり、今年度より、総会と俳句大会が別々に行われることとなり、慌ただしかった。が、羽村会長始め、新メンバーが一丸となって、それぞれの部会で入念な準備をし、スタートした。

私は俳句大会の実行委員長を拝命し、昨年の十一月から応募チラシの作成に取り掛かった。出来上がったチラシの山と奮闘する日々。例年より半年間のずれがあり、応募の到着は遅々と伸びず不安もあった。が、皆様にお声掛けしていただき、最終的には千六百二十五句の応募となった。

この一年間、緊張の連続であったが、有意義な時間を皆様と共有できたこと、また作品集の巻末に千葉県現代俳句協会の「四十年を振り返る」を、略史と共に懐かしい写真を載せることができたことを嬉しく思っています。

懇親会は会場を移し、司会は東國人事務局長と白木暢子副会長のコンビ、徳吉洋二郎顧問の乾杯の音頭で始まった。終始和やかに歓談が続き、ビンゴゲームなども愉しんだ。今大会の皆様方のご協力に心より厚く御礼申し上げます。

ご来賓をお迎えして

高橋宗史副会長と実行委員長賞受賞の長谷川汐音さん

羽村会長・根岸真衣さん・長谷川汐音さん・引率の秋葉先生

千葉県現代俳句協会賞受賞の川崎みどりさんの代理（お父上）

創立45周年記念 俳句大会

後援　千葉県教育委員会・千葉市・
毎日新聞社・千葉日報社・
朝日新聞社千葉総局

【席題の部】〈入賞者作品〉

千葉県知事賞
八月のいちばん高い木さびしい木　松村　五月

千葉県現代俳句協会賞
神もまた愛した素数七五三　川﨑みどり

千葉市長賞
夜行バス涼しき月を窓に置き　笹生　君雄

千葉県教育委員会教育長賞
正論に疲れた椿から落ちる　松本　千花

毎日新聞社賞
ほおずきの中で童話を書く私　石井紀美子

朝日新聞社千葉総局賞
憲法記念日曇った鏡拭いてをり　鈴木　瑩子

優秀賞
帰る事無きふる里の柿を買ふ　大喜　京子
梅は実にふわりと母に逢いに行く　越川ミトミ
死ぬまでを汀と思う秋の蝶　加那屋こあ
水澄んで信じられないほどひとり　土井　探花
房州の大海にある鯨道　座間　等
八月やどこの扉も重すぎる　山中とみ子
いつまでの残暑いつの日の廃炉かな　徳吉洋二郎
半分は向日葵となるかくれんぼ　小藤真由美
仲直り出来ずにメロンだけ匂う　森　孝子

秀逸
生涯の悪友を得て卒業す　國分　三徳
白鳥の白を消さんと雪降れり　浪岡　玄
二ふりの和傘のしづく白牡丹　泉　志眞子
宗教を必要とする心太　岡田　春人
向日葵が諸君と叫び出しさうだ　田口　武
煮崩れて箸に掛からぬ菜種梅雨　泉　志眞子
春一番重たき物はみな捨てて　渡辺しげ子
沙羅散るやガザの涙と思うまで　大見　充子
海ほうずきその優しさがどこか不幸　黒岡　洋子
里山の天気予報土雨蛙　松本　秀紀
敵は助詞苦戦している夜長し　大地　節子
夏草の伸びる音聞く目覚かな　村田　満枝
自己愛を編み込むからす瓜の花　本吉万千子
思想までびしょびしょにしてバタフライ　土井　探花
蟻の列伊能忠敬なら測る　津髙里永子
マンモスに押しつぶされて梅雨に入る　髙木　水志
少年の嘘きらきらとラムネ玉　木之下みゆき
夏休みティラノサウルス歯を磨く　徳吉洋二郎
今朝の秋踏んでたしかな畳の目　安田　政子

佳作
開戦日海は昭和の置手紙　長濱　聰子
夕焼の端のほうから液化する　栗原かつ代
補聴器に雪の降る音うたがわず　大見　充子
どんぐり拾う縄文人の手の記憶　羽村美和子
ひとり居のたこ足配線年つまる　保坂　末子
惜春や針を失くした花時計　保坂　末子
冬芽みな天を指しをり梨畑　中嶋　三雄
目覚めると人間だった敗戦日　秋谷　菊野
いきさつはひらがなにするかたつむり　山本　敏倖
いくつもの神話を孕み滝落ちる　山本　敏倖
葉桜や少し遅れて反抗期　泉　志眞子
ひとつだけ過去を見ている曼珠沙華　杉山ひろみ
すててこを穿くとき寄りかかる柱　髙橋　健文
原爆忌世界共通語で祈る　小山　敏男
案山子立つスマホが人を連れ歩く　中内　火星
秋桜老いて逢ひたき人のあり　添田　昌弘
敗戦忌ラムネの瓶にあるへこみ　大澤　重市
冤罪を背負いて雨のキリギリス　徳吉洋二郎
デリートキー打っても撃っても夏　徳吉洋二郎
夕焼けの空の重さよガザの子よ　徳吉洋二郎
空蝉の足「介護2」のかたちかな　椎名　鳳人
水蜜桃たっぷりと食べ児を産みに　押見　淑子
逆上がり夏野を蹴って出来上がる　鈴木卯ノ花
欲しいのは小さい南瓜泣ける本　鈴木卯ノ花
蟹の目のみな空を向く原爆忌　吉田　耕史
こめかみに海月棲みつく半音階　羽村美和子
鳥雲にもうすぐわたし鳥になる　熊谷　温子
空の蓋あっけらかんと取れて夏　森須　蘭
脳内の磯巾着が喋りだす　森須　蘭
囀をひと色として点猫画　松村　五月
ハンモック太平洋へ腕垂らし　越野　雄治
天高し鞄に坐る曲芸師　白石　正人
味噌汁に百点貰う今朝の秋　宮　たかし
無季という戦争はてなし人類忌　山中　葛子
猫じゃらし地球のかゆいところで揺れ　陸野　良美
敗戦忌呼吸している万葉集　森　光
蜩やわたくしといふがらんどう　浪岡　玄

【高校生の部】〈入賞者作品〉

千葉県現代俳句協会会長賞
盆踊り踊る故郷を我持たず　渋谷幕張高校

高校生の部　実行委員長賞
雨上がり日向の猫と虹を見る　矢野麟太郎　長狭高校

奨励賞
梅雨入りは心も空も雨模様　長谷川汐音　長狭高校
梅雨空に不安が募る大会の日　大栗　姫奈　同右　根岸　真衣

四十五周年に寄せて

感謝の歩み

山中葛子

千葉県現代俳句協会が羽村美和子会長のもと、創立四十五周年記念俳句大会を開催された。継続は力なりの素晴らしさを先ずはお祝いしたい。当協会は昭和五十五年五月十七日に「現代俳句協会千葉県地区協議会」として発足した。このとき現代俳句協会からは横山白虹初代会長・久保田月鈴子・阿部完市・川崎三郎氏を来賓に迎えている。

宮本由太加初代会長のもと会員六十二名の小集団の設立総会だった。その懇親会では和気藹々とした熱気に包まれながら、一同が手をつなぎ輪になって「星影のワルツ」を歌って締めくくられた。奇しくも私は白虹会長の隣で手をつないだ嬉しさ。その温かな感触は俳句の力となって今も鮮やかに蘇る。

同年七月には会報「現代俳句千葉」の第一号が武田伸一氏により発刊され、ここに白虹会長の祝辞がよせられている。そのなかには〈創始は難し、されど守成は更に難し〉という身の引き締まる言葉が記されていた。

創立後は、大木五大夫・益田清・山崎聰・村井和一・三苫知夫・山中葛子・大畑等・秋尾敏・並木邑人・羽村美和子十一代目会長へと受け継がれてきた豊かさ。

さて、私個人を振り返りますと、会長に就任した翌年の三十周年記念俳句大会を目前にしながら「東日本大震災」のため急遽中止の決断をせざるを得なかった状況だった。ほぼ一年にわたる実行委員会を行い、「現代俳句千葉」の記念特集号（九十九号）の発行を終えての、幹部役員の同意を得た決断だった。

幸いにも決断時の対応は、後の大畑等会長、秋尾敏会長の即座の連係プレーの威力によって会員会友が一丸となった熱気であり、「未来に向かう」転機が訪れていた感謝であった。

また、四十周年記念俳句大会がコロナ禍の非常事態により中止となったこと。並木前会長は、ようやくコロナから解放されるまでの六年という会期の中で、千葉県を俳句で結ぶ吟行句会、通信句会など、会員会友を増やしながら俳句の楽しさを推進された。そして羽村会長は、会員減少の時代の変化の中で、一人でも多くの方に出会える場でありたいと、会報（一五七号）に意欲を語られている。

まさに、横山白虹会長の祝辞〈創始は難し、されど守成は更に難し〉こそが未来に向かう激励の言葉として実感される。

人が人を呼ぶ。自然が人を呼ぶ。生命力ゆたかな俳句表現を愛する誇らしさ。

「人間もまた自然の一部にほかならない、人間を自然の中に持ちこんでから、俳句が本当のものになった気がします。」の金子兜太の言葉に学ぶ、老いゆく感謝のただ今にあり、会員の一人として四十五周年記念俳句大会作品への、投句の場に参加できた喜びを大切に続けていきたい。

小山健介氏　講評

山本敏倖氏　講評

佐藤久氏　講評

渡辺澄氏　講評

俳縁あれこれ

秋尾　敏

二〇一六年一月、大畑等会長緊急入院という報せを受け、病院に駆けつけたのだが面会はかなわず、ただ快癒を願うばかりとなった。

その年私は副会長を二期務め終えて退任という運びになっていた。そのことについては大畑さんとは互いに了解済みであった。

大畑さんの訃報を誰から受けたかは覚えていない。ただ、これはまず宇多喜代子さんに伝えなければならないと気付き、大阪のご自宅にファックスを送った。遠方であるから、来ていただけるとは思わなかったが、伝えないわけにはいかないと思った。

大畑さんは、宇多さんの熱烈なファンであった。私も同様だったが熱量で負けていたと思う。大畑さんは本部の幹事として直接宇多会長の下で働き、その人間力に心酔していた。

大畑さんと私を繋げてくれたのは塩野谷仁さんである。私は塩野谷さんの「総の会」で大畑さんの俳句を知った。

その塩野谷さんと私を繋いでくれたのは金子兜太さんである。私が「俳句研究」に書いた兜太論がきっかけでNHKの俳句番組に呼ばれ、そこで塩野谷さんと出会ったのである。

塩野谷さんの句には骨格があって、私とはずいぶん違う句柄だったから学ぶ点が多かった。ただ、感覚的には、私は同じ「海程」の山中葛子さんの方を向いていた。けれど、あれほど奔放な才は持ち合わせていなかった。しかしよく考えれば、私に欠けていたのは「海程」の人たちの土台にある土着性のようなものであった。大畑さんにはそれがあった。

大畑さんは「麦」にいて田沼文雄さんと近かった。私も父が「麦」だったので、遺句集の序文を田沼さんに依頼した。

私から見れば大畑さんは村井和一、横須賀洋子ご夫妻に近い人で、そこが千葉現俳の本流のように感じていた。だから、現代俳句協会のことは、私も村井さんと横須賀さんから教えて頂いていた。

一方で、千葉現俳には九州俳壇からの太い流れもあって、益田清さんは北九州で穴井太さんと「未来派」という同人誌を出していた人だし、三苫知夫さんはその門下である。私が現俳の評論賞を頂いたときの協会賞が寺井谷子さんで、入会の選挙では寺井さんの一票も頂いていたから、私が他の協会の仕事にかまけていたときには、寺井さんから現俳に戻れと強く諭された。

大畑さんの通夜に宇多さんが駆けつけて下さったときの感動は生涯忘れない。何を大切に生きていくかということを教えて頂いたと思っている。

千葉県現代俳句協会は、熱い思いの俳縁を作ってくれた組織であった。結局は、どんな人と出会ってどんな思いをするかということなのだと思う。

羽村会長　挨拶

会場風景

対馬　康子氏　講評

写真撮影（石井稔・東國人・篠田京子）

四十五周年に寄せて

並木邑人

昨年の春から準備を始めた千葉県現代俳句協会創立四十五周年記念俳句大会を滞りなく開催することが出来ました。前日降り続いた雨も止み、少し涼しい位の過ごし易い一日となりましたが、準備を始動させた時の会長として会員会友、殊に役員の皆さんに御礼申し上げます。

まず六年八月の幹事会で実行委員会を立ち上げ、記念式典委員会（総合調整含む）、記念俳句大会、基金募集委員会、広報委員会の各部門を設けました。その後、最重要部門である記念俳句大会の実行委員長を鈴木瑩子さんにお願いし、快く受諾していただきました。また秋尾、渡辺、高木の顧問お三方に相談役をお願いし、ゆっくりとですが準備が少しずつ動き始めました。

最初に大会の会場を確保し、また祝賀会の交渉を始めました。記念講演のお相手は、実行委員会の挙手の結果、池田澄子さんにお願いすることに決しました。基金募集の口座開設は出来ませんでしたが、目標金額を七十万円と定め、一口二千円として募集を開始しました。また俳句大会の高校生の部の計画を継続すべく、文書を各校に発送しました。

広報委員会には、会報「現代俳句千葉」に四十五周年の記事を掲載してもらうと共に、大会の作品集にこれまでの記念大会等の写真を掲載すべく準備を進めていただきました。

これまで三月に実施していた俳句大会を十月に変更したため、投句数が十分達するかどうか懸念されましたが、幸いにも実行委員各位のご努力もあり、近年にない一六〇〇句を超える作品を集めることが出来ました。

そしていよいよ創立四十五周年記念俳句大会の当日です。今回は席題の俳句会を実施しないために、多くの会員に出席いただけるかどうか心配されましたが、講師池田澄子さんの名望もあり、八十名と多くの人にご参集いただきました。

池田さんの記念講演「三橋敏雄を師として」は、期待通りの内容の濃いものでした。最初の出会いは「俳句研究」に掲載された三橋敏雄特集だったそうですが、是非師事したいのに行動に移せないもどかしさが長い間続いたそうです。しかし目指すべき道はここだと決めた情熱が三橋敏雄への手紙を書かせ、「私は自分で師匠を選んだ」と自慢そうに語っていたのが印象的でした。具体的には講演記録に譲りますが、張りと艶のあるお声で最後まで朗朗と講演していただきました。

休憩後の応募作品の顕彰では、一般の部で来賓、顧問に丁寧な講評をいただきました。そして最後の祝賀会へと移動し、当初の予定を滞りなく終えることができました。関係した総ての皆さんに深く感謝申し上げます。

受　付

石井紀美子俳句大会副委員長

長井副会長 開会のことば

道づれ

渡辺　澄

東京をふり出しに数回の引越しで、千葉に辿り着いた。今では考えられない転勤族の家族であった。よくも悪しくも〝旅〟そのものが日常であった。

足を踏み入れたことのない関西に越した時に、はじめの一歩として俳句に出会った。

「渦」という結社の編集者の一人であり、かの〝赤尾兜子〟の愛弟子でもあった。当時の〝柿本多映〟〝和田梧朗〟〝小泉八重子〟と、まさにキラ星の世界であった。六年間をこの地で過ごし、信濃へと転勤することになった。

「諏訪」では河合曽良の墓所であるお寺さんとお会いして、散歩がてらに立ち寄ってみたりした。俳句仲間も数名で訪ねてくれたりした。〝桑原三郎〟、〝藤原月彦〟などなど。今から考えると何とあつかましい私であったことか。有名な俳人の〝小平雪人〟の句集をもって、夫の職場の方がみえた。「ボクのおじです」と云って・・。俳句のとりもつ縁で親しく過ごした。

そして千葉。千葉の開放的な風土が私は好きだ。気働きのできない私が、これだけ優れたメンバーの千葉の俳句仲間に守られていることは、きっと俳句の神さまのおかげでしょう。

「四十五周年に寄せて」

高木一恵

千葉県現代俳句協会四十五年間の賜物の一つに平成二十六年十二月刊行の『合本　現代俳句千葉』がある。三十五周年の記念事業として第一号から第一一五号まで纏めた分厚い上下二巻。当時の会長は大畑等。編集部長が松澤龍一、事務局は不肖高木の担当だった。

編集委員を務めた『昭和俳句作品年表　戦後篇Ⅱ』（昭和四十六年より六十四年）がこの度刊行されて、宮本由太加初代会長の〈天安門に登りて惜しむ秋大き〉も入集したが、第十五号を参照して候補に挙げた句である。

候補作品を探すために覗いた合本で先ず印象に残ったのは養老渓谷の筍狩吟行句会だった。協会発足時から続いて、昭和五十九年第六号の記事には「異常低温で筍の生育が遅れ、恒例の筍狩りは五月六日になった」とある。

〈筍歩き出すかも泥のまま卓に〉　河合凱夫

〈風がまず触れる掘られし竹の子に〉　益田　清

羽村美和子会長が昨今の会員減少を心配されており、『現代俳句千葉』も経費節減で頁数を減らしているが、木之下編集部長が重い荷にお菓子まで積んだカートを曳いて、委員各位と心を合わせて作業する姿に敬意を表したい。また春秋の吟行句会に力を注ぐ役員方をはじめ俳句を愛する皆さんが健在なら、協会も安泰かと暢気に構えたりしている。

「人生百年」俳句を友に

徳吉洋二郎

協会の45年の歴史の中で私が協会業務に携わったのは35周年から45周年迄の十年間である。切っ掛けは故大畑会長から35周年行事のスタッフが足らないということで中途採用された。それから十年、会員・会友の皆さんに俳句を楽しんで貰う為、色々とやりたいと思って来たが、結局何ひとつ出来なかった。

この反省を踏まえ、これからは将来を担う若手の会員増、育成等は現在活発な活動を展開している青年部に期待して、ＯＢは高齢者に「人生百年」俳句を趣味として楽しんで暮らす環境造りができないかと思っている。

協会の高齢者に対する施策は現状では不十分ではないだろうか。句会がその場を提供するに適しているが残念ながら千葉の句会は「研究句会」の名が示す通り、切磋琢磨する場であり、趣味として俳句を楽しむのが主目的ではない。句作による脳トレ。句会、吟行会へ出掛ける筋トレ。これらを協会のみに委ねるのではなく経験豊富な顧問、参与などのＯＢが力を合わせ、協会の協力を得ながら、地域密着型で現代、伝統などの協会の壁を取り払った俳句の場を造り、人生百年を「俳句」で楽しみ、楽しんで貰う、そういう世界を築きたい。その為の草の根活動を展開しようではありませんか。

千葉県現代俳句協会創立45周年記念大会
記念講演　「三橋敏雄を師として」　池田澄子先生

ご講演中の池田澄子先生

池田澄子でございます。私は一人で書いてるのが好きなんですよ。あんまりお話するのは得意じゃないんです。でも自分の先生の三橋敏雄について話す機会をいただいたというふうに考えて感謝しております。

俳句とは何か、どうあるべきか。何を主題にして、どのような書き方をして、どのように人に手渡していくか。それは一人一人が決めていくものだと思います。ただその自由であるっていうことこそが難しいですよね。こういった俳句との関わり方は、私は三橋敏雄に出会うことで育てられたと思っています。今日はその私の思いをあまり気を遣わずにお話させていただこうと思います。

私はひょんなことで急に俳句を始めたんです。当時、『俳句研究』という雑誌があって毎月購読していました。昭和52年11月号は三橋敏雄特集でした。すっかり魅せられてしまってこの人に教えを請おうと決心しました。ところが、いつも私は思ってるだけっていう質(たち)なんです。そして4年3ヶ月後、『俳句研究』の57年2月号がまた「三橋敏雄論特集」でした。更に1年近く経ち、やっと年鑑で住所を調べて手紙を書きました。先生が62歳、私は46歳でした。要するに成り行きではなく、私ひとりで考えて見つけて選んだ、ということが私の自慢なんです。『俳句研究』という雑誌に出会ってなかったら、私は俳句に対してそれほど本気になったかどうかはわからないと思います。

三橋敏雄論特集で驚いたのは、俳句の世界の幅がとても広いことです。どの句集にも同じような熱や志が通っているのがひしひしと伝わってくるんですね。その志というのは、我という個人が今日何をした、何を思ったから書くんじゃないんです。俳句を作る時に言葉や文字が必要なように、人間を描くためにはその俳句を作った我という具象がないといけない。その我は、今お茶を飲んでる私とは限らないんです。人間を描く時の具象ですから、人間の一例としての我。それが三橋敏雄であるっていうふうに、三橋敏雄の句が呼びかけてくるんです。それで三橋敏雄に師事しようと決めた。要するに押しかけ弟子です。実は敏雄も渡邉白泉に押しかけてるんです。そして白泉の紹介で西東三鬼に押しかけている。私が「私は押しかけ弟子です」と言うと、先生はとっても嬉しく思っていてくださったようです。話が逆のようですけど、弟子になったことによって、私がなぜ敏雄を選んだのかということがはっきりとしてきた。そして、亡くなられていっそう、私はあの敏雄の弟子なんだと強く意識するようになりました。

では三橋敏雄はどういう俳人だったのか。十代の頃、新興俳句運動の時代に俳句を始め、生涯、無季俳句の可能性を追求した俳人といってよいかと思います。かといって無季の句をたくさん作っているわけではありません。ただ、大事な無季の句がいくつもある。それは、季語を粗末にするっていうような、季語は無くてもいい、じゃないんです。季語があってはいけないような主題の場合に季語を使わないということなんです。「感動して詠むんじゃないんです。書いた結果に感動するんだ」とよくおっしゃっていました。

また、弾圧された新興俳句そのもの、その作者である先輩たち、戦争での死者、それらへの思いの濃さ。その代弁者であろうとする思いを終生貫きました。このようなところが大きな特徴になるんじゃないかなと思います。

新興俳句はアンチホトトギスとして始まり、新興俳句の中で敏雄は育っていくのですが、新興俳句に先鞭をつけたのは『馬酔木』の水原秋櫻子です。その『馬酔木』を創刊号から全部読んだそうです。ホトトギスを知らなくてアンチホトトギスはない、というふうに考えて、ホトトギスもじっくり勉強する、そういう人なんです。日本という四季のある国に生きていながら無季俳句は簡単には詠めない。ではなぜ三橋敏雄は、成功率が低く学ぶことのできる名句が極めて少ない無季俳句の可能性を追求しようと考えたのでしょうか。「有季定形の俳句には既に名句が多い。無季俳句

にはまだ名句が少ない。じゃあ、僕が名句を作ってみようじゃないか」と考えたのは、敏雄がわずか14歳の時でした。そのあたりが敏雄の敏雄たるところということになるかと思います。これこそ表現者根性と言っていいんじゃないでしょうか。

私の部屋に色紙が二枚飾ってあります。そのうちの一枚は〈待ち遠しき俳句は我や四季の國〉という句です。これすごくないですか。待ち遠しいですよね。その待ち遠しいところに現れた自分の作品、それこそが我であると言ってるんです。有季定形の俳句に憧れている気持ち、その名句を作りたいと憧れている気持ち、四季のある国で自分の次の句を待ち遠しく待っている気持ち。こういう無季俳句なんです。

少し順を追ってお話ししてみます。三橋敏雄は 1920年大正9年11月8日、八王子に生まれました。八王子は俳句がとても盛んで、敏雄の家でも句会があり、その時には墨や硯の用意を手伝ったそうです。生家は裕福な暮らしだったのですが、昭和初期の世界的な不況のあおりで家業が思わしくなくなりました。それで昭和10年、進学を諦めて東京堂という書籍取次店に就職し、学校は夜学でした。東京堂というところは文化的にとても進んだ会社で、短歌・俳句・現代詩・それに演劇などのサークルもあったそうです。入社したばかりの昭和10年5月、俳句の会に誘われました。14歳の春です。そこで作った句が〈窓越しに四角な空の五月晴〉という句で、その後その俳句の会に行くようになったんだそうです。それ以前は、小学校高等科の校長先生が歌人だったので短歌に興味を持ち、北原白秋とか斎藤茂吉などを漁って読んだんですって。短歌には日常は使っていない言葉や、小学校では聞いたことのないような言葉がどんどん出てくる。言葉の世界っていうものがあるんだと思い始めました。

新興俳句運動の盛んな時期に俳句部に誘ってくれた渡辺保夫という俳人も新興俳句の影響を受けていた人で、それが運命的な出会いでした。渡辺保夫に山口誓子の句集を渡されて全部書き写した。それが俳句への出発を促すことになったわけです。その句集から、14歳の敏雄少年は、新しい俳句と伝統俳句があるんだと気がついた。その誓子の句集に「新興俳句をあくまでも守る」と書いてあった。そのことで、自分が今近づきつつある俳句は世の中に一般に広がっているんじゃない少数派の俳句なんだと気がつくんですね。「なぜか僕は少数派という方に行きたくなる質なんだ」と、話すか書くかしていらっしゃいました。どうもその質が私にも強いんですよ。

その少数派の新興俳句ですが、国家権力によって消滅させられます。新興俳句は秋櫻子から始まりました。秋櫻子たちは有季定形の新興俳句、それはいいんですって。新興無季俳句がやられた。伝統的な形式である俳句の季題を否定することは、天皇制を否定することに繋がるという理由で。そして昭和15年に京大俳句弾圧事件を迎えます。俳壇という世界の中での力関係で排除されるということならば想像できますが、相手が国家です。逮捕されて監獄に入れられるんです。そのころ敏雄は 三鬼の紹介で、昭和15年2月に京大俳句に入ったところでした。その年に京大俳句は余儀なく終刊となります。近くに居る先輩たちはみんな逮捕される。白泉も検挙されます。後に三鬼も検挙されます。敏雄はまだ子供だということで、逮捕は免れました。国家権力からの不当な圧力で筆を絶たなければならなかった先輩俳人、俳句に関係ないところで戦争で死ななければならなかった人たち、中でも先輩俳人たちへの深い思いや執念に似た強い無念の思いというものが、その後の人生、その後の敏雄俳句に深く影響を与えていたと思います。多感な少年の敏雄は、俳人にも俳句の世界にも絶望する。そこで白泉たちと古典俳句の研究に没頭します。俳句の作り方はどれだけあるのか、切れ字をどういう風に使うのか等を徹底的に調べて勉強しました。人生は本当に糾える縄の如しで、結果として敏雄の俳句を一層強靭なものにしたと考えられます。

軍国主義の蔓延の中で戦火想望俳句とよばれる俳句が書き進められました。敏雄は17歳の時に戦争という題で57句をまとめます。それが山口誓子の目に留まり絶賛され、俳壇へのデビュー作になります。そのころ俳壇では、戦火想望の俳句に対して、安全な場所にいてそういう句を作るのは不謹慎だという意見が増えてきました。しかし敏雄は「戦場を想像するときに花とか鳥とか詠む心のゆとりはない」とよく話しておりました。

翌14年、敏雄は三鬼が仕事をしていた貿易

会社に入社します。弟子第一号でした。三鬼が「せっかく東京堂という良い職場にいるんだからこの会社に入るのはやめなさい」と諭しても帰らないんですって。損得を考える能力がないんです、三橋敏雄は。

三橋敏雄の最初の句集は昭和41年4月に編まれた『まぼろしの鱶』です。敏雄が46歳の時でした。ちょっと復習しますね。東京堂の句会に誘われて初めて俳句を詠んだのが満14歳。それから色々研鑽して、最初に俳句をきちんと認められ評価されたのが、誓子に絶賛された昭和13年。そして昭和15年が新興俳句弾圧。そこで古典をもとにじっくり勉強した。昭和18年に海軍に召集され敗戦を迎えます。戦後、運輸省航海訓練所で、昭和47年52歳になるまで、有名な帆船の日本丸や海洋丸の練習船の事務長として船の上で暮らし、昭和41年発行『まぼろしの鱶』で現代俳句協会賞を受賞しました。そのことで、その後出版関係者が放っておかなくなったんでしょうね。それで、過去の句も句集になった。だから句集の順番がややこしいことになっています。

敏雄の作品から、一句目は〈かもめ来よ天金の書をひらくたび〉。それまでの俳句の世界になかったような句じゃないですか。〈少年ありピカソの青の中に病む〉。両句とも風流と言った世界ではない、高揚した時代の勢いみたいなものを感じさせる俳句だと思います。〈酒を呑み酔ふに至らざる突撃〉と〈支那兵が銃を構へて来たり泣く〉。悲しい句ですよね。戦場にいる若い兵士たちの不安を17歳の少年が想像しています。本当に早熟な才能・感性をみせていると思います。この完璧な仕上がりで、とても具体的に、しかし戦争は怖いとか嫌だとか表面的には何も言っていないんです。具象なんです。敏雄は「俳句は我慢の詩だ」とよく言っておりました。十代の少年がここまで我慢して書いているんです。

時間が無くなってきましたけれど、もう少しだけ。〈出征ぞ子供ら犬は歓べり〉という句があります。初出は「子供ら犬も」なんです。それを戦後、「子供ら犬は」に変えています。作者が言いたかったのは、出征を見送る親や妻は歓んでいない、むしろ泣いているということ。このことは、敏雄が言葉へのこだわり、助詞ひとつをもきちんと使い切るという態度・技量を見せていたという一例になると思います。〈いつせいに柱の燃ゆる都かな〉という句があります。どうぞご自由に想像してください、という作り方なんです。昭和20年3月10日の東京大空襲、シェークスピアの世界、あるいは平家物語なんかでも似合いますよね。美しくさえ感じます。〈絶滅のかの狼を連れ歩く〉。なんか未練の景です。絶滅した日本狼を連れ歩くんです。投獄までされて実り切れなかった新興俳句、それを志した俳人たち、あるいは戦争で死んでいった人々を忘れない、そういう目の前から消えてしまった色々なものをいつまでも連れ歩く。それが三橋敏雄なんです。

平成8年の『しだらでん』が最後の句集です。人生の締めくくりを意識したような、はっきりと主題を持った句集です。〈戦歿者どち戦歿を相知らず〉。戦没者は他の人の戦没を知らない。お互いに死んでるんですから知らないんです。〈あやまちはくりかへします秋の暮れ〉。過ちにはいろんな過ちがありますね。そんなことを思わせる『しだらでん』という最後の句集は、もう言わなければならないことは言っておく、言い残さなければ死ねないと叫んでいるような張りつめたもののある句集です。

そして、辞世句です。私の部屋にある二枚の色紙のうちのもう一枚です。〈山に金太郎野に金次郎予は昼寝〉。明るいでしょう。敏雄は小田原で亡くなりました。小田原ですから箱根。金太郎と金次郎が出てくるわけです。それに対して、自分は昼寝している。だからいつでも起こしてくれたら起きますよって言ってくださっている句だと私は思っています。ということで、何か自分の思いだけ勝手におしゃべりをさせていただきました。

（文責　篠田京子・川上典子）

花束贈呈　並木監事と池田先生

当日は三橋敏雄の21句が資料として配布されました。その内の12句を池田先生のお話に添って取り上げました。三橋敏雄の俳句を鑑賞するとともに、少数派としての矜持に心を打たれる素晴らしいひと時となりました。

ご来賓と顧問の皆様の講評（抜粋）

対馬康子 先生（現代俳句協会副会長）

八月のいちばん高い木さびしい木　松村五月

日本人の心として、八月が来ればみな同じような気持になりましょうか。私も漸くこの年になり、八月の重さ、日本人が歩いてきた時間の重さというものをしみじみ感じるようになりました。八月はやっぱり原爆とか、敗戦とか、沖縄とかそういうものに対してとても敏感になってきた思いがしています。掲句は一番高い木というのが良かったですね。さびしさよでなくて、これもさびしい木という。さびしさの中には色々な感情があると思いますが、木までもがさびしい、一番目立つ木が一番さびしいと、何とも言えない無常観のようなものがよかったかなあと思います。

神もまた愛した素数七五三　川﨑みどり

七五三の句はたくさんありますが、この句はモダンというかセンスがあるなあと思いました。「神の数式」というＮＨＫの番組がありましたし、俳句と物理とか、俳句と数学とか、結構交差する所があり、数学の美しさとか、物理の美しさとかというものと文学性の接点というものを見るのは割と素直に好きですね。これも素数です。「神もまた愛した素数」とここまで言い切ったところに、子供たちの七五三への愛情が溢れている句と思います。

山本敏倖 先生（東京都地区会長）

ほおずきの中で童話を書く私　石井紀美子

ほおずきの持っている音だとか気分だとか。懐かしさみたいなものを童話を書く私、つまり童話を書いている自分自身の状態をほおずきの中というような、イメージでとらえたということで、とてもよくポエジーが効いていると思いました。でさきほど、八月の話が出ましたが、現俳協で四、五年前に入選句討論会というのを最初にやったときに、どなたでしたか、全国大会では「八月」と「人間」という言葉を出すと大抵通るというちょっと皮肉っぽいことを仰った方がいました。私もその後、ならば両方使ってみたらどうだろうかと思ってやったら、見事秀逸句に入りましたので、一つの参考にしていただければ。でもこれからそれをやると類想句というような処へ行くので、それは考えないといけない問題だと思いますが、八月というのはどうしても避けられないという所がありますね。

小山健介 先生（東京多摩地区副幹事長）

開戦日海は昭和の置手紙　長濱聰子

沢山の人が取っておいでですが、如何にも千葉の根の昭和の捉え方、戦争の捉え方だなあと思いました。館山があって、対岸には三浦半島、東京湾。戦争に関わった湾がずっとあるわけで、中には、続いている戦争に繋がる所もある。やっぱりこう昭和の時代からの戦争の時代からの、そういうものを支えていた太平洋というものは、あらためて読み返していかないといけないのかなあと。

ジンジャーエールほんの少しの同性愛　沢木　京

作品集の中で一番いい句だなあと思った句。人間って百％の男性も又、百％の女性もいない訳で、そういう中で恋心なども色々ある訳で、友人などに聞くと、友情というよりは恋情に近いのではないかと思わない訳ではないという。ジンジャーエールというのは小さな小さな心の動きみたいでいいなあと。これがワインだったり、ソフトドリンクだったりしたら、こういう句は成立しないのでは。

佐藤 久 先生（神奈川現代俳句協会事務局長）

今年神奈川勢は私を含めて誰も入っておりませんで。俳句は点数ではないと言いますけれど、来年は少し頑張りたいと思います。

二ふりの和傘のしづく白牡丹　泉　志眞子

私は赤い和傘を想像しました。その先から雫が白牡丹にかかっている。二ふりというのは勿論、傘をパッと切った。ふりという言葉から、日本刀を思い浮かべました。鋭くぴしっと止めを射す。そこへ白牡丹に雫がふりかかる。映画のワンシーンのような鮮やかさ。

すててこを穿くとき寄りかかる柱　高橋健文

このとぼけた味わいが大好きですね。柱というしっかりとした重みのある存在と庶民的な軽いものとの取合わせ、大黒柱という立派なものでなく、普通の柱だと思うのですが、それがすててこを穿くときに重宝するような柱という。そういうどうでもいいようなことを表現するのは、俳句でしかないかなあ。少しばかりのちょっとずらした感覚、寄りかからないとすててこが穿けないという次元、少しばかりのペーソスも入っているんですけど、これも含めてありのままに受け入れる肯定化した感じ、これが俳句の滑稽かなと思います。

（講評12Ｐ下段へ続く）

諸家近詠

初めから壊れていたの野分雲　秋尾　敏
房鶏頭嵐を呼ぶという少女
隣室は速いステップ十三夜
鰯雲蔓は虚空に行き止まる　徳田　悠子
親と子と籾振り分けに来よ雀
秋光やコンバインからピラミッド
序にかえてひめつるそばの見舞文
香箱の蟹鮮やかに同窓会　置鮎　隆一
手のひらの平和と自由小春風
雑草になり切ることよ三尺寝
日に一回夫婦喧嘩で風邪知らず
雪女郎一人並べる百人一首　荒木　洋子
花びらが花びらを追う三歳児
紫の静かな主張花菖蒲
白樺派別荘地跡夏の雲
八月の海静寂のモノトーン　土肥　勲
嗚呼猛暑快進撃の嗚呼猛虎
吊革を持つ腕残る広島忌
退院の妻は客人花芙蓉
車椅子押せば道開く秋桜　安井　三緒
葭切の逆さ止まりに鳴きゐたる
横浜を濡らした後の春の虹
晩秋の色とは柿のすだれかな
枯れてゆく一年草の潔し

晩夏の証は裏返すポケット　山田たかし
完成した風景夕焼の老夫婦
真実の焦点雪椿の花芯
冬の靴音完結できないメロディー　渡邉マミヲ
銀漢や音のみ走る救急車
霽月夜憑物落ちた心もち
とこしへに恋は熱病ダリア剪る
何となく鰈を買ひぬ父なき冬　菊地　喜己
ただいまの声で夕顔開き初め
親の文読むたびうるむ梅雨の月
カナカナの声が友の名連れてくる
反省の言葉薄れて敗戦忌　渡辺　澄
二人づれとは永遠の春景色
手花火の使いきれない一生涯
青田風むかし電車に手をふって
さくらさくら兵士ひとりに母一人　羽矢　眞人
明日からを今日からとして水を打つ
夕闇を剥がして翔べる雁の群
のどけしや番茶を啜る夕端居
曲るたび見えて車窓の遠花火　横須賀弘子
核要らぬ東西南北アマリリス
夏の月眠れぬ人のためにある
ほたる草見送る朝のカーテン越し
君ありてこの世のありしほたる草

秋尾　敏

まとめて申し上げますと千葉県らしくて良かった。今どこの大会も上位に入る句が同じような句になってしまって、こうすれば何処でも点が取れるよみたいな。でも千葉現俳だけは昔から違っていました。ですが最近怪しくなってきました。でも一位の句を見ていますと、千葉県らしいなと思いましたし、うちだけは違うぞと私は言いたい。現代俳句は時代状況をちゃんと摑む、それを出来るだけ、軽く言う、でも深いというあたりかな。並木前会長、その後も会を盛り立ててくださりありがとうございます。新しい稚魚が次々と千葉県から出てきます。心強い想いです。

渡辺　澄

つい最近読んだウクライナの詩人の詩です。「私が死ななければならないなら、あなたは生きていなくてはならない。私の物語を書くために」。という導入部分と結びの部分が「私が死ななければならないのなら、その死に希望を運ばせて、その死を物語にするのです」。体調を崩し、後ろ向きになっていた私の気持を震い立たせてくれた一片の詩でした。文学は手放せないものだとつくづく思いました。

白鳥の白を消さんと雪降れり　浪岡　玄

この句の非常に上手いところは、消さんとか、消したとかそういう言葉ではなくて、作者の思いの丈を描いた白を消さんと雪降れりとした表現の仕方が大変気に入りました。

八月のいちばん高い木さびしい木　松村五月

感性の良さがありありと見え、簡潔でいい句と思い頂きましたが、自分の結社の主宰の句でした。帰ったら先生方に怒られそうです。

（文責　木之下みゆき）

諸家近詠

曝け出す一生分の更衣　和田　三枝
スタミナの如何に謀れど梨の芯
秋草の微笑みパン屋開店す
繋がりは過去から長いデラウエア　吉田　耕史
寒晴やベネチアブルーの家に棲む
貧しさを皆持ってゆけ雪解川
スイトピーさあこれからが面白い
失念し嗤われにゆく葱坊主　村田　満枝
西方の彼方へ盆の客送る
秋高し骨をたたいて診断す
読経に秋思の膝を並べ居る
すすき野や丸く枯れゆく夫婦かな　大地　節子
梅雨明けやポストは新聞噛みしまま
八月を午後の紅茶に入れて飲む
振り向けば母はまだ立つ夕月夜
冬ざれや人の心に欲しいナビ　佐藤　鮎美
悠仁さま成年式に秋津飛ぶ
大空を持ち上げる如の桜かな
ヒゲダンを懸命に歌う立待月
青蜜柑鬼滅の鬼にも過去があり　倉岡　けい
爽涼の白湯にひろがる海の色
草の実の飛ぶ寸前が水びたし
裸木となる満天星にある月日
サキソフォン反るだけ反って星飛ばす　栗原　正子
花柊知る君となら紅茶の香

枯れきってあまねくやすらう月下の野
純白に怯む老年深雪晴
白梅が「もし」紅梅「ええ」と咲きそろう　橋口　久子
おはようの一音高く水温む
日傘から背中貫く雨後の陽矢
湯上がりの背中に夏の陽の軌跡
地を蹴って大根の白せり上がる　前田　孝子
汗の子の力漲るふくらはぎ
晩年という鈍行に乗り朧
毛糸編む縺れし記憶解きながら
豊の秋この空ガザの地に続く　泉　志眞子
ふたふりの和傘のしづく白牡丹
そこまでと傘さしかける濃紫陽花
夕暮の雨の木更津蟇蛙
寄り添えば肩に雨降る合歓の花　本吉万千子
嘘ついた昨日を隠し夏帽子
律の風わたる無言館に黙礼
稲光蠢く疑心こなごなに
団栗の古里がらんどう墓じまい　武井　和子
雲の峰湿原囲む山蒼く
恐竜のごとくに動き雲の峰
登山帽振りヤッホーと応へけり
曼珠沙華山越えて来し喜寿二人　山中　葛子
夕花野白い一羽が降りて来た
草むしるこころのきれいに空っぽ

なんでも見える小窓を閉めて月の秋
ただ一本の薔薇の時代の傘に濡れ　山口　彩子
盆用意佛具の膳も古びたり
桶一つ泛かせて阿房の磯なげき
いずくより風吹き入りて秋すだれ
寒暖の隙間へ落とす砂時計　大庭　芳郎
房総の海の光や金盞花
裃を脱ぐがごときや竹の皮
ちぬ釣の潮騒聞こゆ無人駅
小手かざし沖見る朝の浜焚火　渡部　健
炎天下草陰草の如く生く
一徹に純に鳴き継ぐ牛蛙
城跡に揚がる雲雀にある平和
緑陰にスマホと共に立話　阿部さくら
風割つて「はやぶさ2号」大夕焼
すべり台もんどり打つて犬ふぐり
言の葉の下りるまでゆく落葉道
夕虹やあの根元まで逢ひにゆく　横山　郁子
ニーチェの馬単調重ね夏の果
扇風機六人家族だった頃
分水嶺細き流れの糸蜻蛉
昼顔の巻き付いている「現地販売」　木之下みゆき
過疎化する村につばめの帰還兵
空耳の進軍ラッパ桜東風
彫像の体幹確と夏に入る
一面の麦秋へひざまずく風

私の感銘句

	作者名	号	頁
大庭　芳郎			
あぶくがひとつ赤い金魚の嘘ひとつ	川上　典子		1523
完読の余韻と遊ぶ冬銀河	土肥　勲		1525
桜蘂降る真夜中の非常口	坂間　恒子		1538
海鳴りは地球の軋み寒椿	徳吉洋二郎		1542
ほんたうは火の鳥の舌椿落つ	千葉　信子		1542
空といふ出口ひろびろ夏休み	浪岡　玄		1543
故にクレソンせせらぎを独り占め	富澤さち子		1554
桜蘂降る真夜中の非常口	坂間　恒子		
桜の蘂が降る夜という幻想的な描写と非常口という場所が重なり、時間、場所の組み合わせも良く余韻を感じさせる良い句だと思います。			
鈴木　瑩子			
水無月の息災の菓子二つ買う	小川トシ子		1522
思いだすたび新しい雪降れり	渡辺　澄		1523
自画像をはがせば見える大花野	下村　洋子		1538
抗いのすがた曠野の冬すみれ	髙橋　宗史		1542
蚕豆の床に転がる静かな日	増田　豊子		1542
調律は自由海の日の海が鳴る	木之下みゆき		1555
白紫陽花うそつく前の深呼吸	鈴木卯ノ花		1555
自画像をはがせば見える大花野	下村　洋子		
わたくし最近、花野とは、黄泉路の途中にあるのではないかと思っています。死を考える歳になってきました。			
横須賀弘子			
転んでも笑って立つ子チューリップ	川上　典子		1523
寒芹の置かれし朝の無人駅	大庭　芳郎		1524
春暁やデラシネの青き旅立ち	土肥　勲		1525
たましいのはじめのみどり芹薺	清水　伶		1539
春潮をすする岩鼻わが流寓	並木　邑人		1542
氷水カランと回す聞き上手	宮　たかし		1543
月見草きのうの錆びた昼がある	羽村美和子		1543
春暁やデラシネの青き旅立ち	土肥　勲		
デラシネとは根なし草を意味する言葉で、流れ者を指す。この流れ者はこの地にいられなくなり、誰も見ていない早朝の旅に出るのだ。だから、ブルーな旅なのである。この先、どうなるのであろうか、気にかかる。			
尾形ゆきお			
春光あまねしわが残生の雑木山	高木　一惠		1538
瞳をひらく人形八十八夜寒	塩野谷　仁		1539
身の内に蟬の音止まぬ木が一本	星野　一惠		1543
合歓の花眠りしあとも微熱して	中村　冬美		1543
手長猿揺らして移る秋の雲	宮下　奈緒		1554
人嫌いして人恋し栗の花	山口　彩子		1554
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け	木之下みゆき		1555
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け	木之下みゆき		
まず「文士」というほとんど死語に近い言葉に引かれた。そして驚嘆すべき私小説家車谷長吉氏を想い、「意地」とか「痩せ我慢」という言葉も連想した。既に亡くなられた氏の足元にも及びませんが、私もかくありたいと思う。			
小多田文子			
煩悩の捨て所なく懐手	鈴木まんぼう		1538
春光あまねしわが残生の雑木山	高木　一惠		1538
原点に帰る他なき裸木よ	菅ノ谷文子		1538
全開の深夜のシャワー春愁い	塩野谷　仁		1539
天と地を丸洗いして風光る	椎名　鳳人		1542
さくらさくら原罪とやら初期化せり	並木　邑人		1542
一滴を効かせ新茶の薄みどり	富澤さち子		1554
鈴木卯ノ花			
白木槿死よりも老いを恐れをり	鈴木まんぼう		1538
吊るし雛褒めつつ脈をとるナース	鈴木　房州		1539
席譲られて片陰の人となる	橋本志津子		1542
椋鳥群れてたちまちヨハネ黙示録	浪岡　玄		1543
線描の裸婦の息づく聖五月	中村　冬美		1543
噂話は気にしない主義紅葉山	森須　蘭		1555
胡瓜もぎ青い地球を丸かじり	阿部さくら		1555
席譲られて片陰の人となる	橋本志津子		
作者はきっと席を譲られたことがそれまであまりなかったのかもしれません。素直に厚意を受け入れられないけれど、無下にはできない。「片陰の人」を演じて、自分を納得させようとしたのではないでしょうか。			
中山　皓雪			
だれも年寄るみんな年寄る雪残る	秋尾　敏		1522
来し方をほぐし毛糸を編み直す	川上　典子		1523
春光あまねしわが残生の雑木山	高木　一惠		1538
父の顔知らぬ我が手に蛍来る	菱木　良一		1542
田の神の息ぎつしりと今年米	宮下　奈緒		1554
海底の戦艦叫ぶ赤のまま	吉田　耕史		1554

秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け　木之下みゆき　155 5

中村　冬美

鎮痛剤効かぬ極月戦火なお　前田　孝子　152 2
乱丁の少女期ポインセチア真っ赤　小野富美子　152 3
極楽でも地獄でもなく日向ぼこ　鈴木まんぼう　153 8
雪しんしんフランス積みの赤レンガ　五味ちひろ　153 9
月見草きのうの錆びた昼がある　羽村美和子　154 3
小春日や卒寿をめざし歩きだす　吉田　耕史　155 4
白紫陽花うそつく前の深呼吸　鈴木卯ノ花　155 5

佐藤　鮎美

長縄を皆んなで飛んで春の雲　村田　満枝　152 3
白木槿死よりも老いを恐れをり　鈴木まんぼう　153 8
誕生日忘れた母に花衣　佐藤　直子　153 9
通信簿見せ合う仲間柿若葉　島　隆史　154 2
欠けた歯に小さき春の兆しあり　松澤　伸佳　154 2
秋茄子ずっと戦後のまゝでよい　吉岡　一三　155 4
蜘蛛の囲の蜘蛛と目の合ふ殺せない　阿部さくら　155 5
蜘蛛の囲の蜘蛛と目の合ふ殺せない　阿部さくら

知識ある朱(あか)いめでたい虫と私が勝手に呼んでいる虫こそが蜘蛛である。作者は目が合った時怖さを感じたに違いない。そして句にして、命のとおとさにも向き合った。そこが良い。嫌いでも句にすれば段々好きになります。

倉岡　けい

人間が蝶々になれる試着室　金子　未完　152 4
送り仮名のようなやさしさ滴れり　石井紀美子　152 5
石楠花の寺に移した住民票　澤田　寿一　153 8
抗いのすがた曠野の冬すみれ　高橋　宗史　154 2
草引けば要の石に朝が来る　永妻　和子　154 3
夏羽織するり噺は佳境へと　増田　元子　154 3
調律は自由海の日の海が鳴る　木之下みゆき　155 5

保坂　末子

うららかや巨大な尻を誇る土器　市川ふみを　152 3
数へ日や最後の指を重く折る　浦野　五郎　152 3
半円の風光り合う眼鏡橋　椎名　鳳人　154 2
しゃぼん玉天上はどこも自由席　徳吉洋二郎　154 2
鉦叩チラシの裏のラブレター　松澤　伸佳　154 2
心中に鉛の重み原爆忌　菱木　良一　154 2
思いきり回転ドアを押せば夏　星野　一惠　154 3

松岡　節子

雪催い匂い立つまで刃物砥ぐ　下村　洋子　153 8
青空は海底のやう榠樝の実　佐藤　浩子　153 9
袖いつも濡れていた母芋の露　高野　春子　153 9
月明に開く天守の設計図　中嶋　三雄　154 2
縄文の土器に色射す新樹光　中村　冬美　154 3
下総の水湧くところ夏兆す　中村　博子　154 3
調律は自由海の日の海が鳴る　木之下みゆき　155 5

岡田芙美子

声変わり少しすごみの葱坊主　池田　幸　152 4
菜の花のまどろみに似て死もありぬ　下村　洋子　153 8
春一番死ぬまで続く締切日　重田　忠雄　153 9
ビー玉のころがつてくる原爆忌　千葉　信子　154 2
春が来た持ち物全部に名を入れて　保坂　末子　154 3
蜘蛛の囲や降り立つ駅は過疎の町　三浦　侃　155 4
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け　木之下みゆき　155 5

佐藤　鈴子

春愁の出口思えりあおい海　小川トシ子　152 2
とりあえずもがくことから黄金虫　遠藤　寛子　152 3
閲兵のごと山茶花の垣根かな　岡田　春人　152 3
人間が蝶々になれる試着室　金子　未完　152 4
新刊の俳句の森にいる夜長　石井紀美子　152 5
わがことを叱るわれ在り冴返る　髙橋　宗史　154 2
父の顔知らぬ我が手に蛍来る　菱木　良一　154 2

山崎　公子

手のひらに木の実の微熱夕日落つ　前田　孝子　152 2
過去形できらきら喋る冬木の芽　和田　三枝　152 4
生きてると能登枯露柿の便りかな　高木　一惠　153 8
太陽を抱きて果てる油蟬　重田　忠雄　153 9
空といふ出口ひろびろ夏休み　浪岡　玄　154 3
日暮よ排泄順調ならばよし　吉岡　一三　155 4
鉄棒の子ら万緑を蹴りあげる　阿部さくら　155 5

木之下みゆき

粉雪やSUVの鼻っ面　秋尾　敏　152 2
手花火の使いきれない一生涯　渡辺　澄　152 3
生きてると能登枯露柿の便りかな　高木　一惠　153 8
乗り継ぐや金木犀の二系統　杉山真佐子　153 9
ほんたうは火の鳥の舌椿落つ　千葉　信子　154 2
草引けば要の石に朝が来る　永妻　和子　154 3
老いながら半透明に晩夏逝く　山中　葛子　155 5

強化部だより

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

夏雲ネット句会隔月実施。（次回一月）年二回吟行会実施。（次回十二月十四日）参加希望の方はご連絡を。六十歳以上は準会員。kokomiya2003@yahoo.co.jp（三宅まで）

あしたば吟行会のお知らせ

十二月十四日（日）十時、京成金町線柴又駅改札口に集合。柴又帝釈天（駅から徒歩三分）到着後自由散策。十一時半から十二時にジョナサン柴又店集合。（帝釈天から徒歩九分）昼食後句会。十四時解散予定。参加無料。持ち物は筆記用具、ノートやメモ帳、昼食代、交通費。当日の飛び入り参加も大歓迎。青年部以外の方やご家族やご友人もぜひお越しください。

第十一回あしたば句会（九月開催）

一人一句抜粋 兼題「案山子」「忘れ物」

ママチャリの空気一杯豊の秋　石井　稔
思草ふつうに生きていたかった　鈴木卯ノ花
案山子ケンケンダルマサンガコロンダ　白木　暢子
足二本欲しげな顔で立つ案山子　東　國人
片方のピアスと秋を待ってみる　小藤真由美
屋根裏に忘れたままの晩夏光　無　子
黒葡萄乳房のように含みけり　佐藤　鮎美
研修中バッチをつけて遠案山子　遠藤　寛子
忘れ物の話に花の咲く秋野　三宅たくみ
左手のほころびを縫う赤とんぼ　松本　千花
夏怒濤右クリックで抜けてみよ　羽村美和子
案山子にも本心見える角度あり　青野　友香
赤とんぼ自転車置いて帰りけり　森井美惠子
地球人へネームプレート持つ案山子　陸野　良美

初心者講座　第3期

第六回～七回

傷痕のバックドラフト曼珠沙華　荻野由美子
秋日和クリアファイルで届く位記　宮原　青佳
秋風や花の絶えざる軍馬の碑　横須賀弘子
恋は詩にコキア紅葉は歌声に　鈴木卯ノ花
朝紅葉宿坊薫るかまど飯　佐藤　憲一

毎回いろいろな課題が出ます。次回までに課題に沿った一句または二句と当季雑詠一句の、合わせて三句を作ります。第六回目は取り合わせ（二物衝撃）の句、第七回目は時節柄季語に拘り、紅葉（黄葉）を三句でした。

俳句は五七五の十七音の詩です。表現してはいけない世界はありません。しかし短いがゆえに的確な言葉と間合いが求められます。そのための俳句形式や季語の勉強は不可欠です。また何かに拘って書いてみるのも良いと思います。正岡子規は弟子にも連作を勧めており、自身も「鶏頭」で十句作った際「鶏頭の十四五本もありぬべし」の句が出来たと言われています。拘ることにより、突き抜けることが出来、新しい自分を発見することが出来るのです。その楽しみを皆で味わいたいものです。

途中からの参加も大歓迎です。ご一緒に楽しみましょう！

（羽村美和子 記）

《会員・会友の近況》

・エアコンの効いた室内に籠る日々。（渡部　健）

・気がついたら八十代の後半に。俳句に関わっていてよかったと思います。時代の暗さに負けないおとなでいましょう。（渡辺　澄）

・五歳のラブラドールを飼っています。散歩をすると皆さんが話しかけてくださいます。（横須賀弘子）

・無農薬で新鮮野菜作り、頭の体操？に俳句と将棋。成果は今一ですが、目標を定め挑戦することが何事にも大切。（吉田　耕史）

・俳論で「現代俳句流〇〇（なまえ）切り!!」があるらしい。相手の成長の為の俳論であってほしい。仲間がいてこそ俳句!!（佐藤　鮎美）

・「諸家近詠」へのご批評を賜り次の糧とさせて頂きたく。四十五周年へのご準備、ご尽力、心より御礼申し上げます。（栗原　正子）

・二年前大病。今年八十の坂を登り切り動けることの幸せを実感。思うような句は作れませんが句会を楽しんでいます。（橋口　久子）

・腰痛で治療中です。坐骨神経痛が出て長引いています。健康第一です。（泉　志眞子）

・心が身を放れて行くのを卒寿を越えて殊更意識。俳句を初めて四十年、「あなたの幸せは何」と問われれば、「俳句を続けていたこと」と、言えるでしょう。（山口　彩子）

・ありきたりの俳句から脱皮したく句集を読んだり奮闘中。がんばります。（大庭　芳郎）

・猛暑から解放されてほっと一息。五十年以上助けてくれた愛車を手放し、淋しい限り。これからは足を鍛えます。（阿部さくら）

・中学の裏手にアレレと言う間に曼珠沙華。酷暑が去り、過ごしやすい季節が巡り来たのだと肩の力が抜けました。（渡邉マミヲ）

❑❑ 津田沼研究句会報告 ❑❑

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三九五回（令和七年八月十二日）

司会　鈴木　瑩子

みんみんのどこまで細き今年声　股野　久子
「天皇海山群」谺ス津波夏　栗原　正子
炎天や昔むかしのひとえ着て　渡辺しげ子
腹の虫崖っぷちに居て辱暑　鈴木　瑩子
逃水へ呆け防止作戦はじまる　伊与田すみ
あの人は木馬に乗って月に行く　小林　実
ひまわりの首の傾き太陽の塔　白木　暢子
冷房は生命維持機引きこもる　星野　一惠
藤沢本江戸長屋より昼寝覚　増田　豊子
遺されしメール六行ほおずき市　大喜　京香
黒南風の解はいずこに詐欺の国　並木　邑人
ひまわりや誰も知らない明日の顔　徳吉洋二郎
鳴きそうな亀助けよと秋の声　宮　たかし
八月が螺旋階段降りてくる　池田　博臣
声明や伽藍の下の蟻地獄　長井　寛

❑❑ 青葉研究句会報告 ❑❑

（於：千葉市民会館）

●第一六二回（令和七年七月二十四日）

司会　徳吉洋二郎

冤罪を背負いて雨のキリギリス　徳吉洋二郎
原罪とは如何なる呪文袋角　並木　邑人
めくっても永遠に消えまい原爆忌　加賀谷秀男
音信は既読分球のアマリリス　森井美惠子
銀漢やゆつくり沈む大絵皿　越野　雄治
蜘蛛の囲に落日のエンドロール　石井紀美子
Ｓｕｉｃａピッ！罪探知機は夏霧に　栗原　正子
蜘蛛の囲に絡まれもがく白日夢　重松　眞
机上乱雑溽暑のバイオリズム　長濵　聰子
蚊の唸りジグソーパズル浮きあがる　横山　郁子
夜の部の勘三は罪人夏芝居　鈴木まんぼう

❑❑ 柏研究句会報告 ❑❑

（於：柏市「ハックルベリー書店」２階）

●第一五〇回（令和七年十一月八日）

司会　岡田　春人

蜩が私の中に降りつもる　川上　典子
人の輪へ写楽飛び出す酉の市　松澤　龍一
木枯に髪のみだれる野紺菊　下村　洋子
鰯雲高層ビルは海の底　藤好　良
生き方に色の濃淡秋薔薇　野口　京子
太陽の懐に入る冬はじめ　長井　寛
泣く日などなかった勤労感謝の日　椎名　鳳人
小六月寺に日溜り猫だまり　岡田　春人
冬将軍進軍ラッパ鳴りやまず　小野　勲
掘り起こす楸邨の夢鰯雲　山口　明
冬薔薇一輪男勝りかも　木之下みゆき

❑❑ 君津研究句会報告 ❑❑

（於：君津市生涯学習交流センター）

●第六十八回（令和七年十一月七日）

司会　徳吉洋二郎

石井さん清音（さざなみ）のよう月のよう　佐藤　鮎美
柞紅葉老ゆる早さで降りしきる　村田　満枝
冬銀河埋もれしままの標石　小澤　富子
石仏に止り馴れたる赤蜻蛉　森　孝子
捨ててくる言葉の重石大花野　石井紀美子
石段の願いは山盛七五三　古賀としあき
しんしんと加齢の隙間落葉散る　長濵　聰子
秋逝くやモジリアニ売る石畳　越野　雄治
膝を抱く水辺の少女石叩き　山田たかし
夏を呑み秋に吐き出す石榴の実　大地　節子
断腸花荷風の抒情七十九年　北野　耕兵
たましいを吐く深秋の石切場　徳吉洋二郎
離れては三度振り向く秋の山　羽矢　眞人
神無月神の授けし石頭　東　國人
糸瓜忌の天空を駈く野のボール　長井　寛
子の笑みに優るものなし石蕗の花　泉　志眞子
石蹴って少女の寡黙秋夕焼　前田　孝子
御恩とは尾頭秋刀魚いただくこと　並木　邑人

❑❑ いすみ安房研究句会報告 ❑❑

（於：勝浦・藤屋そば店）

●第十回（令和七年九月二十八日）

司会　東　國人

無人駅の柱鏡に微熱あり　坂間　恒子
炎天や飢餓の瓦礫を走る影　柴田　洋郎
平蜘蛛の脱皮音なき夏養生　徳田　悠子
月の舟カンパネルラと御萩食ぶ　並木　邑人
からすうり添付ファイルがありません　鈴木卯ノ花
冬瓜の記憶喪失感を掬いとる　白木　暢子
やわらかい林檎のままで終われない　吉田　耕史
絶妙な距離にいる君レモンの香　石井紀美子
くちびるは知らぬ唇鳳仙花　小藤真由美
願い事ひとつ新涼の勾玉に　木之下みゆき
烏瓜もう繋がらない糸電話　羽村美和子
畑行かばオクラ月光の降る淡さ　髙橋　宗史
杜甫李白西行芭蕉雁渡る　長井　寛
酸素ボンベを牽いてる　秋はながい影　政成　一行
キョンばかり見てきて夜の鹿の声　東　國人

四十五周年記念基金ご報告（第五次）

（一口二千円・敬称略）

（一口）　渡辺しげ子
（二・五口）　村田満枝
（三口）　なかもと淑子
（十口）　津田沼俳句研究句会

基金一次分　一四〇、〇〇〇円
基金二次分　二三六、〇〇〇円
基金三次分　二一五、〇〇〇円
基金四次分　一五二、〇〇〇円
基金五次分　三三、〇〇〇円
計　七七六、〇〇〇円

四十五周年記念基金参加への御礼

大変な物価高騰の折、会員・会友の皆様には基金に応募下さり誠に有難うございました。

会員・会友の減少の中で目標額の七十万円を上回りました。会長を始め関係役員一同、有難く嬉しく存じています。お陰様で記念大会の盛会を支えることが出来ました。残金は今後の千葉県現代俳句協会の円滑な活動のために大切に使わせていただきます。

これからも当協会の総会や俳句大会や吟行会、会報へなど、御参加ください。みんなで会を盛りあげていきましょう。

四十五周年基金委員会（髙橋宗史　記）

図書紹介

■ **句集『一本の櫂』　髙橋健文**

令和七年九月六日刊　文學の森

そつと置く檸檬水平線うごく
青空はあをぞら鶴の帰る日も
一本の櫂オリオンはまだ遠い

掲示板

《会員・会友異動》

● **逝去**　（会員）八島岳洋　袴田菊子
● **退会**　（会員）畠　淑子　中村直子
● **新会員・会友**
（会友）置鮎勝美　並木邑人　紹介

《令和七年度第四回幹事会》

日　時　令和七年十一月十八日（火）午後一時
場　所　船橋市勤労市民センター
議　題
一　四十五周年記念俳句大会について
二　七年度秋の吟行会について、八年度春の予定
三　八年度総会（三月二十二日）について
四　青年部活動報告
五　初心者向け講座について
六　一般社団法人現代俳句協会（本部）の動向について
七　各地区協会俳句大会について
八　会報一五九号について
九　各研究会の状況について
（君津、いすみ・安房、青葉、津田沼、柏）
十　その他
・会員、会友動静
・会計監査打合せ

令和八年一月二十日（火）午後一時
決算報告、事業報告、次年度事業案、予算案

■令和八年度総会のお知らせ（予定）

日　時　令和八年三月二十二日（日）
会　場　千葉市民会館
席題句会を予定しております。
※詳細は次号一六〇号（令和八年三月一日発行）にて、お知らせいたします。

□事務局・編集部だより□

● 一時間以上にわたる池田澄子先生のご講演記録を二人で担当しました。文字起しした原稿を読み合わせ、割付ページに納まるよう一字一字を確認し合い、細心の注意を払い纏めました。校了時の安堵と達成感は得がたいものとなりました。貴重な講演の記録です。どうぞ皆様お楽しみください。

（川上典子・篠田京子）

● 皆様方の熱い思いのこもった四十五周年記念号お届けいたします。歴史と重みを感じながらの編集でした。

（石井紀美子・木之下みゆき）

現代俳句千葉　第一五九号
令和七年十二月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会
会長　羽村　美和子

現代俳句千葉編集部
〒278-0037　野田市野田
六七七-一-A二一五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒299-2521　南房総市白子六七三-一
東國人
TEL　〇四七〇-四六-二九一五
FAX　〇四七〇-四六-三〇七二